黒部市帰国児童生徒教育研究会会報

Access

第 ５９号

２０２５年(令和７年) ９月１日

これからの共生社会に向けて、本校が目指す教育とは

-黒部市立中央小学校の取組-

黒部市帰国児童生徒教育研究会
会長　平 田　　恩
（黒部市立中央小学校 校長）

本校では、昭和 58 年度より帰国子女教育に取り組み、平成 13 年度からは外国人児童も交えた教育を推進してきました。そして平成 18 年度からは、黒部市として国際化教育がスタートし、「外国語科の導入」や「共生社会の実現」をテーマに、多様な子供たちが共に学び、育つ環境を築いてきました。本校では、ここ数年は「共生」を合言葉に、これからの共生社会に向けて研究を進めています。

グローバル化が加速し、多様な人々が共に生きる社会は、もはや特別なものではありません。異なる文化や価値観をもつ人々が共に生活し、共に働く時代は、すぐそこまで来ています。しかし、多様性は同時に摩擦や課題を生む可能性もはらんでおり、だからこそ、教育の力でその課題を乗り越える力を子供たちに育んでいかなければならないと考えています。

本校では、これからの共生社会に向けて、特に重要だと考える「3 つの柱」について取り組んでいきたいと考えています。

1.「違いを認め合う心」を育む

共生社会の土台は、何よりもまず「違いを認め合う心」です。言葉や文化、考え方の違いを、排除すべきものではなく、むしろ互いを豊かにする「個性」として捉える。これは、子供たちが多様な背景をもつ友人と関わる中で、肌で感じ、学んでいくものです。私たちは、異なる価値観に触れる機会を意図的に創り出す必要があります。例えば、各国の文化や歴史を学ぶ授業、世界の遊びを体験する活動、あるいは保護者の方々にもご協力いただき、それぞれの文化を紹介していただく機会を設けることも有効だと思います。「〇〇さんの国ではこうなんだね」「△△さんの考え方は面白いね」といった、違いに対する素直な好奇心や探究心を引き出すこと。そして、その違いを尊重する姿勢を、日々の学校生活の中で繰り返し伝えていくことが重要だと考えています。

2. 多様な視点から物事を考える授業の導入

共生社会を築くためには、他者の立場に立って考える力が不可欠です。 授業の中で、多様な視点から物事を考える機会を意識的に設けることが有効であると考えます。

〇道徳教育・・・違いを認め合い、尊重することの重要性を学ぶ。

〇社会科・・・世界の文化や歴史、社会問題について学び、多様な価値観があることを知る。

〇 国語科・・・登場人物の気持ちを深く読み解くことで、他者の感情を想像する力を養う。

こうした授業を通して、子供たちは自分とは異なる考え方や感じ方があることを知り、共感する力を育んでいきます。

3. 一人ひとりの「居場所」と「役割」を創造する

子供たちは、自分がこの集団の一員であると感じ、貢献できる役割があるときに、安心感をもち、自尊心を育みます。共生社会への教育は、特定の子供だけにあるのではなく、すべての子供たち一人ひとりが、かけがえのない存在であることを実感できる環境づくりに他なりません。言語や文化の壁がある子供たちが、安心して自己表現できる場をどう創り出すか。得意なことを活かせる役割をどう見つけ出すか。例えば、日本語指導が必要な子供には個別指導を充実させ、同時にその子がもつ母国の文化や言葉を学級で紹介する「先生」になってもらうこともできます。また、周囲の子供たちには、困っている友達に自然と手を差し伸べる「サポーター」としての役割を経験してもらう。このように、互いが助け、助けられる関係性の中で、子供たちは「共生」のあり方を学んでいきます。

本校では、9 月 26 日(金)に公開研修会を予定しています。今回の公開研修会では、この 3 つの柱を軸に、子供たちが未来の共生社会を力強く生き抜くための「心のコンパス」を育んでいきたいと考えています。

国際教育研修会

海の向こうで暮らしてみれば

～家族５人のギリシャ生活～

黒部市立明峰中学校　桶屋 宗伯　先生

在外教育施設（日本人学校）の志望動機

高志野中学校で帰国子女の学級担任となる。在外教育施設のことを本人から聞き、親の仕事の都合により、在外教育施設で学んでいる子供たちが世界中にいることを知る。海外で頑張っている子供たちの役に立ちたい！

１回目　2003年4月～2006年3月（3年間）ギリシャ・アテネ日本人学校（教員として勤務）

帯同家族（妻、長女、次女、三女）

2回目　2022年4月～2024年3月（2年間）タイ・バンコク日本人学校（教頭として勤務）

帯同家族（妻のみ）

【アテネ日本人学校の様子】（2003年～2006年）

・現金通貨がドラクマからユーロに変更。日系企業の撤退→日本人学校の児童・生徒数の急激な減少。存続の危機。

・アテネオリンピックに開催に向けて、オリンピック関連企業の子供たちがアテネ日本人学校へ編入学

・オリンピック終了後大量帰国に伴い、児童・生徒数が激減

・2007年　アテネ日本人学校閉校

【ギリシャでの生活】

・ギリシャ人に「あなたは日本人ですか？」「日本について教えてください」とよく聞かれた。

日本人学校に赴任するまでは、日本で生活し、日本語を話すことが当たり前の世界だった。海外で暮らしてみると、日本の伝統や文化に触れる経験や体験が不足していたことに気づかされた。

・飛行機に預けたスーツケースが届かないというトラブルが発生！長女が英語で説明し、無事滞在先のホテルにスーツケースが届いた。英語が話せれば、なんとかなるということを実感した。受験科目にあるからではなく、語学力はこれからの生活に必要だと認識した。現地の学校に通っていた三女が最も上手にギリシャ語を話せたので、通訳の役割を担っていた。

【日本人学校の2つの役割 】

●児童・生徒の学力の保障

●日本の伝統や文化の「情報発信」

児童・生徒→小さな「親善大使」

日本の紹介

「ソーラン節演舞」「和太鼓の披露」

【海外生活を経験してよかったこと】

○家族の絆が深まった。

○日本とは異なる文化や価値観に触れ、日本の文化や伝統を客観的に見つめ直すことで、視野が広がった.

○海外に出かけたり、学んだりすることに対して抵抗がなくなった。

第１回保護者会

６月２１日（土）に中央小学校で第１回保護者会を開催しました。2組のご家族が参加されました。言語のことや学校や保育所での様子について話題になりました。

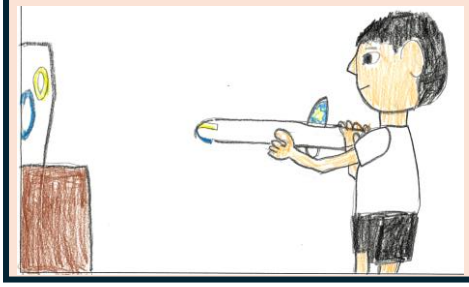
１２月には、未就学児、小学生の家族対象に親子ふれあい活動と保護者会を計画しています。お気軽にご参加ください。

サマースクール

８月１日（金）にサマースクールを開催しました。子供１１名、大人５名の参加がありました。

傘袋でロケット作り【吉田科学館】

傘袋におもりとはねをつけるだけで･･･よく飛ぶロケットの完成！はねに思い思いの色を塗り、かっこいいロケットを作りました。



いろをぬったはねとおもりをきって、かさぶくろにはりました。きいろいちいさなあな（的）にいれられてうれしかったです。

【絵日記より】

海底地下道【生地地区】

階段を降りて、一番下まで行ってみると･･･まるでクーラーがついているかのようにひんやりしていて心地よかったです。涼しくて心地よかったので、ここでたくさんおしゃべりをしました。

水だんご作り体験【生地コミュニティセンター】

生地あいの会の方に水だんご作りを教えていただきました。熱々の生地をちぎったり、棒状に伸ばしたりしました。できたての水だんご、とてもおいしかったです。

水だんごがとてもおいしかったです！

ぼくがサマースクールに参加して心に残ったことは、水だんご作りです。生地あいの会の人たちがやさしくていねいに教えてくれました。作りたての水だんごはもちもちしていてすごくおいしかったです。【絵日記より】

清水めぐり【弘法の清水と岩瀬家の清水】

こんなに暑いのに、とても冷たい水が湧き出ていることにびっくり！清水によって水の味が違うことにもびっくりでした！

バスの中や歩いている時に自己紹介ビンゴをして、たくさんの人と話せました。シールもたくさん集まってうれしかったです。

ちょっといい話

相手意識の大切さ

今年度1年生の担任をすることになり、「月1回の英会話の授業でいかに子供たちを英語好きにさせるか!」をテーマに ALT と授業の進め方について考えてきました。授業のメインは ALT との対話。そのゴールがあるからこそ、本時での練習が意味をなすのだと思い、ゴールを明確に伝えるようにしてきました。子供たちは一生懸命練習し、ALT に自分の思いを英語で伝えられたとき、とてもいきいきとした素敵な顔を見せてくれます。改めてゴールを起点に学習の進め方を考えていくことの大切さを子供から教えてもらいました。

そんなある日、ALT が帰国することになり、それを知った子供たちは何かしたいという思いに。折り紙を折ってサプライズプレゼントをすることにしました。その際、「日本語でもいいのかな?」「ありがとうって英語でどうやって書くの?」など聞いてくる子供たちの姿がありました。相手を気遣う温かい心が育っている様子が見られ、私まで温かい気持ちになりました。

黒部市立宇奈月小学校　　教諭　宮﨑　史夏

「ケレケレ」という習慣　～距離感の大切さ～

インド人のホストファミリー

大学時代、フィジーに語学留学に行きました。フィジーには「ケレケレ」という習慣があり、それは「家の中にある物は、誰の物であろうと触ったり使ったりしてもいい」というもので、渡航者のスーツケースも例外ではないため、盗難防止のため必ず南京錠をかけるように言われていました。恐る恐る現地に行くと、私のホストファミリーはインド人でした。フィジーではフィジー人とインド人が1:1の割合で暮らしています。インド人にはケレケレの習慣はないそうです。インド人はシャイですが仲よくなるとどんどんと会話してくれて、日本人に似た距離感を感じました。また、毎日カレーを食べるという噂を聞いていましたが、本当に毎日食卓にカレーが出てきました。ある時、フィジー人のおうちに行くことがありました。遊びに行っただけで熱烈大歓迎!　ご飯もごちそうになり、「いつ来てもいいよ」と自分を家族として迎えてくれました。その時、「ケレケレ」という習慣は恐ろしいものではなく、みんなを家族同然に考えているからこそ生まれた習慣なのかもしれないと考えました。人によって距離感を考えることの大切さを知り、また異国の文化を思い切り楽しむよい経験ができました。

黒部市立村椿小学校　教諭　小西　智之

フィジー人の仲良くなった家族

Thank you! See you again.

Samantha　Lung

Thank you so much for your kindness over the past 3 years. Kurobe will always have a special place in my heart. It is a city with beautiful mountains, the sea, and lovely people. I have had such a wonderful time teaching your students, and I hope that they will continue to enjoy studying English! Once again, thank you for all the love you have shown me.

Anneliese Babka

It was a long-held dream of mine to live in Japan. I'm so happy I was able to fulfill that dream in a welcoming place like Kurobe. Although I wasn't here long, the memories and friends I made here will remain with me always. I hope I made an impression on all of you, too. I can't wait to take my loved ones here, and show them my favorite places. Please use English to make new friends and explore different parts of the world. I wish you all the best!